

# 禅茶録（その二）

東都 寂庵 宗澤 著  
片野 慈啓 訳

## （三）茶の意の事

茶の心は即ち禅の心である。だから、禅の心をおいて他に茶の心はなく、禅の味を知らなければ、茶の味わいも知らない、ということである。

それなのに世間で茶の心とするのは、一つの趣おもむきを立てることをいっている。そのたてた趣を本当の禅茶ぜんちゃの心と勘違いして、もっともらしい様子が顔あらに現われ、えらぶった態度を見せてむやみに人を悪く言い、世の中の茶人ちゃじんは皆茶の心を知っていない、と言って、或は茶の心は言葉で説くべきではない、自分を見つめて納得せよ、と行って、これを教外別伝きょうげべつでんなりと思ひ、独り覚ひとっているという邪見ざんを起す、是れ皆趣のなすことである。それだから、自分が立てた趣ほかと他の人が立てた趣に、彼れ、我の隔へだてをつくり、人は悉ことごとく茶の心を知らない、とばかりにして笑うが、趣は人々ひとびとにあつて人々によってかわるものである。自分の趣と違うのをお互いに悪く言うのは、争あらしいのもとであつて、自慢じまん気な心はますます募つり、ついに悪い趣の俗茶ぞくちゃがおもしろくなってゆき、一切よこしまの邪おもな想おもいが生まれるのである。是を本当の禅茶と思つてしまったならば、本当の茶から遠ざかること、その距離は大変な距離である。

それ趣とは、到いたる、という意味で、あの善と悪の行為の原因から、

生きとし生ける者をその生まれた所へ行きつかせるのも、これである。六趣ろくしゅ めいりんの迷論とは、これに迷うことをいうのである。だから仏性ぶつしょうには、心を動かすことを第一がいの戒破りとし、心を動かさないのが禅定ぜんじょう かんようの肝要なところであるので、趣を立ててすべての事を行うのは、禅茶では、きわめて嫌う事なのである。それなのに、その心を動かし向うことに重きをおいて茶事ちゃじをやるから、はじめから禅機ぜんきとは完全に違っている。すべて趣とは一切の物にこだわって心を動かし、思慮、作為さくいを用いることなので、侘わびにこだわって心を動かすために人よりすぐれている、という自慢しょうの心を生じ、器物きぶつにこだわって心を動かすために細かい寸法のとりきめが生じ、数寄すきにこだわって心を動かすために好き嫌いの好みを生じ、自然にこだわって心を動かすために自分だけの工夫を生じ、足るにこだわって心を動かすために足らない、の思いせを生じ、禅道にこだわって心を動かすために邪悪な法を生じる。このように心を動かすことは、皆悪い趣のもとである。

これら、まさに恒常性こうじょうせいなきものを常つねと思ひ楽ならざるものを楽と思ひ、五蘊ごうん仮和合けわごうに過ぎぬものを我がと思ひ、けがらわしいものを清浄せいじょうなるものと思ふ、という、四種よんしゆの誤れる見解けんかいを好み求めることに近い。経文きょうもんにも、人の命は呼吸の間に在り、と説かれていゝ。それならば命はすぐに終わって体ははかない、ということことを常に思つて、珍しいかわった器うつわを集めて大切にしまっておき、益えきの無い室むろに執着して生涯を送り、又、心は楽しくない情けい況きやうを楽しいこと、と感違あひして茶室や庭に沢山の財宝ざいほうを使い、調理の好し悪しを選んで、来賓らいひんの接待けいたいに心を勞ろうして最上の楽しみとなし、又、法むは無我むがであるのに、人々各々得た、と思つている趣を鼻はなにかけ、自分の所作しよさを何事にもよし、とのみ取つて、他人を輕蔑がし、我を立てて偏見へんけんにとどまり、或は一切清浄せいじょうでないものを清浄せいじょうと理解し、おおよそ汚れた事を好み行い、それをかへつて清きよい事ことと思つて、清浄心しょうじょうしんをも汚す。これ皆世俗せきよくの人の喜ぶ茶事ちゃじで、まことにすべて逆の悪道あくどうである。『法華經』の注には、「お

ろかでも好き勝手を楽しみ、いつもいろいろな苦しみを受ける」とも言っている。それ、すべての生きているものは、垢重あかじゆうく情じゆう深く、世の中が始まって以来、様々な物質界、客観界に迷い、ろくでもないことを楽しんでいろいろな苦しみを受け、生死しゆうじ・輪廻りんねする欲界しきかい、色界むしきかい、無色界むしきかいの三種の世界と地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道ろくどうに流転して、その場所、場所いのちで命いのちを受けるがため、衆はいろいろな場所しゆじゆうで生ずる、という意味で衆生しゆじゆうというのである。

もし衆生の苦悩をのがれようと思ったなら、ひたすらに信心をもち、禅茶の門はいに入って、悟りを開き、煩惱の束縛を離れて自由の境に到るよう工夫を行うべきである。だから迷っている人の行うことは善も悪も共に悪である。夢中になっている事は、有も無も両方とも無である、迷っている時の邪よこしまな見解けんげは、是も非もすべて非である。そうであれば、世間の趣にこだわって真だの善だのと言っても、どうして信じるに足るものであろうか。却って役にも立たない浅はかな楽しみで時間を過ごし、いたずらに時間を過ごせば、仏陀様の教えに背そむき、茶道さどうの罪人とも言えるものである。只、少しの時間でも大切に、一瞬もひきさがることなく、禅茶の徳をもってすばらしい道を修行することこそ大事なことであらう。

#### (四) 禅茶器の事

禅茶うつわの器は美しい器ではない、珍しい器ではない、宝物の器ではない、古い器ではない、円満で控えめで清らかな一心をもって器とするものである。この一心しゆうじゆう清浄しゆうじゆうを器として扱うのが禅者の自在なはたらきのある茶なのである。

そうであるから、名物などといって世の中にほめ、もてあそぶ茶器は、貴ぶほどのことはない。一杯の茶を飲むのに値段もつけられない程の高価な器を買い、倉に収納して宝としよう、というのは、何事であらうか、道のために全くいいことがない。「腹の小さい人が、宝を

持つ、その時その場に災害を招く」のたとえがある。『老子』に「手に入れにくい宝を貴ばない、人々を盗人にさせない」ともいう。総じて器の善し悪しを言うべきでない。善悪二つの邪な見解を切り捨て、実際の姿が清浄である器を、自分の心に求めるべきである。

そもそも一心の器は、人が作ったり焼いたりした物ではない。天地自然の器であれば、陰陽日月森羅万象百界千如などさまざまな現実も、同じ理屈をもっていて、赤々と月が照らすのと同じ、控え目ではっきりした仏心である。それなのに、自然と煩惱の雲を起し、仏性の光をおおい、塵あくたに染まって好きなだけ情欲を生じ、貪欲、瞋恚、愚痴の三種の煩惱を発して、一心清浄は遂に変わって、三種の毒の器になってしまう。

それだから、世間の衆生は、大昔から五つの濁りに汚れ、自分の器の質の悪いことも気づかず、すでに真理に暗いことを寄り集めたのであれば、善と誇っても本当の善ではない。『老子』にまた「世間の人、皆美しいものの美というものを知っているつもりでもこれは悪ばかり。善の善たることを知っているつもりでもこれは不善だけ」と言っている。これはたとえば、お香に慣れてる人が、その香をたいして知らないように行うのはみな悪道であるのと同じであるということ。専ら禅茶のはたらきをもって汚れ多い器を捨てて、本来清浄の器に入れ替えたいものである。『法華経』に、「努力は善を行う人の器を大きくする也」とおっしゃっている。だから、強いて心を励まして修行すれば、念ずる心の弱い者も必ず善い器になるだろう。たとえ思いが実らずとも、禅茶の門に立ち寄れば、しまいにはきっと善い人物になるだろう。『家語』に、「好き人と一緒に行くのは霧や露の中を歩くのと同じである。衣類をぬらしてないといっても、しばしば湿っている。知識のない者と一緒に行くのはトイレの中に居るのと同じである。衣類を汚してなくても、しばしば臭いがする。悪い人と一緒に行くのは、剣の中を歩くのと同じである。人を傷つけまいとしても、

しばしば驚き恐れることがある」とあるので、けっして悪い道にたよってはいけない。

原因は必ず結果に至るのきまりで、悪をたよれば悪い所へ行き、善を好めば善い所へ行く理屈なのであるから、ひたすらに勇氣ある心を奮い起こし、ていねいに禅茶の工夫をしっかりとすれば、現在の世では権力者から牢獄に入れられることもなく、死んでも三途の川の門をとざされ、天に昇り道を得ることは疑いないことである。かくの如くに成就したのを、天地同一円照清浄の宝の器とする。これを禅茶の器と称する。古くさい器や珍しいかわった物をどうして宝とすることがあるうか。

#### 著者プロフィール

---



片野慈啓（本名／鈴枝）

昭和23年東京生まれ。千葉大学教育学部卒業。  
元小学校教諭。昭和44年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。